



日本一小さなトンボ ハッチョウトンボ

湿地の草の陰に真つ赤な小さなトンボが見られます。ハッチョウトンボの雄です。体長20mm程で、一円玉の中に頭から腹端までが納まる程の大きさです。日本で一番小さなトンボで世界的にも最小の部類に入ります。

雄は成熟すると鮮やかな赤色になりよく目立ちます(写真左)。これに対して雌は茶褐色で黒や黄色の横縞模様をしています(写真右)。雌は子孫を残すために、生息している場所に溶け込み、目立たず鳥などに食べられにくくなっているのかもしれない。

ハッチョウトンボは本州・四国・九州に生育しています。その分布は局所的で、平地から丘陵地・低山地にかけての水がにじみ出ている湿地や湿原などで、日当たりが良く、ミズゴケ類が生育するごく浅い水域が広がっている環境を好みます。陶史の森はハッチョウトンボにとって適した環境なのです。

近年、開発や環境汚染により著しくハッチョウトンボの数が減少しています。彼らが暮らす自然環境を守り続けていきたいです。

教室のご案内

草花のしおり作り教室

(要申込：定員10名)

7月7日(日) 午前9時～11時30分

バードウォッチング(自由参加)

6月23日、7月28日の日曜日

午前9時～11時

※集合場所は林泉の池堰堤

トキハク
プロジェクト

新博物館準備だより

学芸員は、いま何してる？

美濃陶磁歴史館
(☎55-1245)



広報とき 昭和49(1974)年4月号より

左上の写真は、昭和49年4月発行の「広報とき」掲載の一枚です。泉町の隠居山で発見された太古の哺乳動物「パレオパラドキシア・タバタイ」の化石がレプリカとなって東京から帰還、当時の二宮市長がテープカットを行う瞬間です。

この化石は、昭和25年に隠居山の中腹で、地元の高校生と名古屋市の教員が発見しました。当時は「デスモスチルス」とされ、全身骨格の発見は世界初のことでした。とても貴重な発見だったため、化石は東京大学の研究室が預って研究されることになり、東



見学する小学生 令和5年11月

京へと旅立ちました。地元では、研究が終われば化石は戻ってくると思っていたところ、何年経っても戻らないため、返還運動が起こり、その結果、レプリカとして土岐市へと戻ることになりました。化石の現物は、現在も東京の国立科学博物館で保存されています。

このレプリカは、今でも旧文化会館に保管され、子どもたちの学習に活用されています。新博物館でも活用していくため、準備を進めています。

※土岐の歴史を記録した写真を収集しています。お持ちの方はご連絡ください。

第2回 写真が語る土岐の歴史